

複合外来語の短縮に見る特殊モーラの非対称性

那須 昭夫

1. はじめに

本稿では、複合構造を持つ外来語（複合外来語）の短縮パターンの分析を通じて特殊モーラ間の音韻的性質の違いについて考察する。複合外来語の短縮構造では、撥音・二重母音のグループと促音・長音のグループとで短縮形への編入のあり方をめぐって顕著な違いがある。特殊モーラが元の複合語の後部要素の第2モーラにあるとき、それが撥音ないしは二重母音であれば短縮形の中に残りやすいが、促音・長音は脱落しやすい。

(1) 複合外来語の短縮

a. 撥音・二重母音

カラー+コンタクト → カラコン

プラス+マイナス → プラマイ

b. 促音・長音

ポスト+ペット → *ポスペツ (> ポスぺ)

テレホン+カード → *テレカ二 (> テレカ)

この振る舞いから、同じ特殊モーラであっても促音・長音のグループと撥音・二重母音のグループは何らかの点で異なる音韻的性質を有していることが分かる。本稿では、特殊モーラと分節音の関係に注目しながらこの性質上の違いについて考察する。

2. 短縮と特殊モーラ

2.1 特殊モーラの脱落

外来語の短縮現象は、ベースとなる形態の構造によって大きく二つのタイプに分けられる。ひとつはベースが単純形式である(2a)であり、もうひとつは複合構造を持つ(2b)である。本稿ではこのうち後者について考察する。

(2) a. 単純形式からの短縮

オートマ (オートマチック)

リストラ (リストラクチャリング)

コンビニ (コンビニエンス)

b. 複合形式からの短縮

サラドレ (サラダ+ドレッシング)

ロリコン (ロリータ+コンプレックス)
 デジカメ (デジタル+カメラ)

(2a,b)は見かけ上よく似ているが語形成のあり方が次のように異なる。(2a)ではベースの語頭から順次モーラが切り取られるが、(2b)では複合構造を構成するそれぞれの要素の先頭から2モーラずつの切り取りが起り、結果的に「2モーラ+2モーラ」の構造からなる短縮形が作られる。

ところが、複合外来語の中には上に述べた2モーラずつの切り取りを起こさないものもある。(3)に挙げるのがその一例である。

(3) ポテチ (ポテト+チップス)
 ポスペ (ポスト+ペット)
 デパガ (デパート+ガール)
 ファミマ (ファミリー+マート)

ベースの後部要素に促音ないしは長音はその第二モーラとして含まれる語では、これらの特殊モーラが短縮語の中に取り込まれずに脱落してしまう。一方、同じ特殊モーラであっても撥音や二重母音は「ツアコン(ツアー+コンダクター)」や「プラマイ(プラス+マイナス)」のように短縮形の中に編入される。

こうした特殊モーラ間の振る舞いの違いはほぼ一般的なものと考えられる。複合外来語の短縮過程での特殊モーラの脱落傾向を調べた重原(2004)によれば、促音・長音は他二者に比べて著しく脱落しやすいことが報告されている。重原のデータに基づいて特殊モーラの脱落率をまとめたのが(4)である*¹。

(4) 後部要素第2モーラの脱落率

種別	語数	割合
/N/	1/68	(1.5%)
/J/	0/12	(0.0%)
/R/	44/70	(62.9%)
/Q/	29/29	(100.0%)

この統計からは、促音・長音は撥音および二重母音に比べ、複合外来語の短縮過程において明らかに脱落しやすいことが分かる。特に促音に至っては脱落するパターンしか生じない。長音の場合、個別的に見ると「オレジュ二(オレンジ+ジュース)」のように脱落しないパターンも認められるが、それでも撥音や二重母音に比べるとかなり高い割合で脱落傾向を示す。

2.2 補完パターン

促音および長音は単に短縮形に編入されにくいだけでなく、これらの特殊モーラを含む複合外来語の短縮形にはそのほかの特殊モーラの関わる形には見られない次のよ

うな特徴も観察される。(5)に示す短縮語では、「構成要素の先頭から順次2モーラずつ切り取る」という短縮語形成の原則から逸脱するパターンが起こっている。

- (5) a. ラキスト (ラッキー+ストライク), メルアド (メール+アドレス)
b. ハリポタ (ハリー+ポッター), ミニモミ (ミニ+モーニング娘)

上の語形では、ベースに含まれる促音・長音が単純に脱落するのではなく、それらの特殊モーラを飛び越してその直後にある自立モーラが短縮語の中に編入されている。(5a)は促音・長音がベースの前部要素の第二モーラにあるもので、(5b)は後部要素の第二モーラにあるものだが、いずれの場合においても同様のパターン(飛び越し)が起こっている。

一方、重原(2004)によれば、撥音や二重母音を含む構造ではこうした飛び越しの事例は認められない。たとえば「カラー+コンタクト」から「*カラコタ」, 「プラス+マイナス」から「*プラマナ」といった自立モーラによる補完を含んだパターンは作られない。ここにも、先ほど2.1で指摘したことと同様な、特殊モーラ間の振る舞いの違いを見出すことができる。

補完パターンをめぐってはもう一点注意すべき事実がある。長音が含まれる構造では、それがベースの前部要素/後部要素のいずれの第二モーラに含まれるかによって振る舞いの違いが観察される。前部要素の第二モーラに長音が含まれる場合、必ずしも(5a)「メルアド」のような補完パターンだけが起るわけではなく、(6a)に例示するように長音を編入した短縮形が作られることがある。しかし、その一方で後部要素の第二モーラに長音が含まれる構造では、(7b)のように補完パターンが起るか、または(7c)のように長音が素直に脱落するかのいずれかの構造しか起らない。

- (6) a. モームス (モーニング+むすめ)
スーフファミ (スーパー+ファミコン)
ビーサン (ビーチ+サンダル)
b. ミニモニ (ミニ+モーニングむすめ)
ヤフオク (ヤフー+オークション)
ラブモド (ラブラブ+モード)
c. ミスド (ミスター+ドーナッツ)
カンペ (カンニング+ペーパー)
デパガ (デパート+ガール)

この事実は、同じ長音であってもそれがベースの前部要素/後部要素のいずれに属するかによって短縮形への編入をめぐり扱いの違いがあることを示している。ベースの前部要素にある長音は短縮形に編入される可能性を含んでいるが、後部要素の長音は前部要素の長音に比べて脱落しやすい傾向が見られる。

2.3 問題の所在

ここまで複合外来語の短縮過程における特殊モーラ間の振る舞いの違いについての言語事実を見てきたが、これらの事実を通じて浮かび上がるのは次のような問題である。第一に、促音・長音のグループと撥音・二重母音のグループとで短縮形への編入をめぐる非対称な振る舞いが生じるのはなぜかという問題がある。促音および長音には、他の特殊モーラにはない共通の特性が備わっており、それゆえに短縮の過程で脱落しやすいと考えられるが、ではその共通の特性とは一体どのようなことだろうか。第二の問題としては、補完パターンをめぐる生じる(6a)と(6b)の非対称性、つまり前部要素に含まれる長音と後部要素に含まれる長音の振る舞いの違いがどのような理由で生じるのかという問題が指摘できる。そこで以下、本稿ではこれらの問題をめぐり、音節構造における特殊モーラの性質に焦点を当てながら考察を進めてゆく。

3. 特殊モーラの階層

3.1 自立性と安定性

周知のことであるが、特殊モーラは自立モーラに対する範疇であり、それ自体で独立の音節を構成できない（自立できない）ことから付属モーラとも呼ばれる。日本語のモーラをこのように「自立:特殊」の二分法で捉える見方は長らく定着してきたが、一方で、特殊モーラの中にも一定レベルの自立性を備えたものがあることや、四種類の特殊モーラで自立性の度合いに差が認められることが知られている。上野（1984）は方言の分布を通じて特殊モーラの自立性の差を検証し、その度合いに次の階層性があることを見出している。

(7) 自立性：(高) J > R > N > Q (低)

また窪菌（1992, 1999）も、歌謡におけるリズムの与え方や超重音節へのアクセント付与に見られる音韻特性を通じて、やはり(8)と同様の階層性が認められることを明らかにしている。特殊モーラは確かに自立モーラに対するひとまとまりの音韻範疇ではあるが、厳密にはそれぞれの特殊モーラの間には自立性に関する漸次的な性質の違いがあり、(7)の左側にある特殊モーラほど語や発話の分節単位として自立モーラに近い特性を示す。

窪菌（1999）ではこの階層性が分節の聞こえ度（ソノリティ）と密接な関わりを持つものであることが指摘されている。(7)を見ると全体的に母音性の特殊モーラのほうが子音性の特殊モーラよりも自立性が高いが、これは明らかに母音と子音でのソノリティの差（母音 > 子音）と平行的な関係にある。さらに母音性・子音性それぞれのグループにおいても次のような違いが認められる。まず母音性の特殊モーラでは、音色の違う母音が続く二重母音のほうが同一の音色の続く長音よりも知覚的に差異が認識されやすく、その分自立的な性格を帯びやすい。子音性の特殊モーラでは、阻害音である促音よりも鼻音である撥音のほうがソノリティが高く、自立性の違いもこれに対応している。

上に見た自立性の違いは、あるモーラと別のモーラとの間の選択的な関係に基づいて導き出される概念である。これに対し、モーラ間の連立的な関係——すなわち、ひとつの構造の中で隣接するモーラとモーラの関係に基づくと、(7)とは別の階層性が見出される。窪菌(1999)はこれを「安定性」と名づけ、音節を構成するまとまりとして当該の特殊モーラがどの程度安定したものであるかに関して次の階層性が見られることを、言い間違い現象の分析を通じて明らかにしている。

(8) 安定性：(高) N > J > R > Q (低)

先ほどの自立性の階層(7)と比べて顕著なのは、モーラ間の連立的な関係においては撥音/N/が最も高い安定性を持っていることである。窪菌(1999)はこの理由をソノリティの観点から次のように説明している。すなわち、CVX という1音節内でのVとXの間のソノリティの差は/CVN/構造が最も大きく、次いで/CVJ/・/CVV/の順に低くなり、このソノリティの落差の大きさが(8)の階層と一致するというわけである。

3.2 脱落傾向と特殊モーラの階層

こうした特殊モーラ間の性質の違いは、複合外来語の短縮過程における特殊モーラの脱落傾向と密接な関係を含んでいる。まず、(8)に示した特殊モーラの安定性の差は、(4)の統計に反映された脱落傾向の差とまさしく並行的な関係にある。すなわち短縮過程で脱落しにくい特殊モーラ (N, J) ほど(9)の階層では安定性が高く、逆に脱落しやすい特殊モーラ (R, Q) ほど安定性が低いのである。

(9) 脱落傾向と安定性

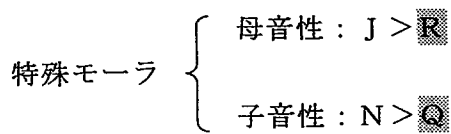
脱落しにくい	脱落しやすい
N, J (安定性：高)	R, Q (安定性：低)

このことから、/CVX/構造(Xは特殊モーラ)におけるVとXの連立的な関係において安定性の高い特殊モーラほど、短縮の過程では脱落しにくいことが分かる。

ところで、(9)の分類と(4)の統計的事実、ならびに(8)の階層を重ね合わせてみて分かるのは、(8)の階層のちょうど中間において特殊モーラの脱落の可否をめぐる大きな格差が生じていることである。つまり「N/>J/」のグループと「R/>Q/」のグループとの間に脱落傾向をめぐる大きな断絶が認められるわけだが、この断絶の意味するところについて少し考えてみたい。

N, JのグループとR, Qのグループと間に生じる断絶の動機をめぐることは、安定性の階層よりもむしろ自立性の階層(7)の方に問題を解くための重要なヒントが隠されている。(7)の階層は(4)の統計に現れた脱落傾向と必ずしも平行的ではないが、特殊モーラを母音性のものと子音性のものとに分けて考えることにより、自立性の階層と脱落傾向との対応関係を次のように読み解くことができる。(10)は、自立性の階層(7)を母音性・子音性それぞれの特殊モーラに分解して示したものである。

(10) 特殊モーラの分類と脱落傾向



「>」はその左辺の特殊モーラが右辺のものよりも自立性が高いことを表し、網掛けは(4)の統計で脱落率の高かった特殊モーラを示している。こうしてみると、母音性・子音性のそれぞれのカテゴリーにおいてより自立性の低い特殊モーラ/R, Qが複合外来語の短縮過程において脱落しやすい性質を持っていることがはっきりと分かる。

では、母音性・子音性のそれぞれのカテゴリーで相対的に自立性の低い特殊モーラ/R, Qには、自立性の高い特殊モーラ/J, Nと比べてどのような性質が備わっているのでしょうか。次節ではこの点についてプロソディとセグメントの構造上の関わりという観点から検討を加える。

4. 分節構造への影響

4.1 独自分節の有無

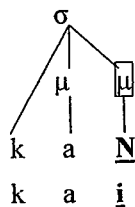
促音であれ長音であれ、また撥音であれ二重母音であれ、特殊モーラは韻律的にはおしなべて重音節に含まれる第二モーラに相当し、特殊モーラを含む音節のプロソディは次のような一般的な構造を持っている。(11)で四角で囲んだ μ 節点が特殊モーラの所在である。

(11) 特殊モーラの位置



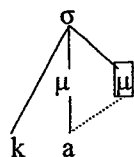
四つの特殊モーラは韻律構造の面ではいずれも共通の位置づけ——重音節の第二モーラに属すること——を持つ。しかしながら、 \square で示した節点と分節構造との関係においては特殊モーラ間に顕著な違いが見て取れる。この位置に生じる撥音・二重母音が独自の分節を備えているのに対して(=12), 促音および長音は独自の分節を持たない(=13a,b)。

(12) 撥音・二重母音

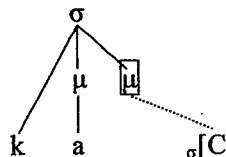


(13) 長音・促音

a. 長音



b. 促音



長音(12a)は、隣接する核母音と同じ音色の母音が重音節の第二モーラ $\boxed{\mu}$ に連結する構造をなす。 $\boxed{\mu}$ そのものは独自の分節を備えているわけではなく、隣接する核母音から母音の音色を割り振られる形でその長音としての実体が具現化される。促音に至っては同一音節内に対応する分節が存在せず、直後の音節の頭子音が $\boxed{\mu}$ に割り振られることによって初めて分節上の実体が顕在化する性質がある。すなわち、長音・促音の両者に特徴的なのは、独自の分節を持たず、隣接する母音ないしは子音からのいわば「借り物」の分節によってモーラ節点 $\boxed{\mu}$ が充足される点である。この点において独自の分節を有する撥音・二重母音とは明らかな構造的違いがある。

4.2 知覚効率と脱落現象

では、特殊モーラが独自の分節を持つこと／持たないことは複合外来語の短縮過程にどのような形で影響を与えているのであろうか。

あるモーラが独自の分節構造を持つということは、そのモーラの存在を認識するに足る十分な知覚的手がかりが音韻構造の中に備わっていることにつながる。たとえば「鹿 /sika/」と「弛緩/sikaN/」のペアでは語末に特殊モーラを含んでいるか否かが弁別に寄与する特徴につながる。「弛緩」においてその特殊モーラの存在が認知されるのは、このモーラに付随する分節/N/が隣接する核母音のモーラとは異なる特性として鼻音特性を備えているからにほかならない。同様に「鹿 /sika/」と「司会 /sikai/」でも、後者の語末の特殊モーラにその直前の/a/とは音色の違う母音/i/が二重母音の副音として伴うがゆえに弁別性が発揮される。

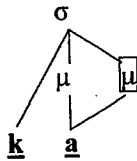
翻って、長音や促音のように独自の分節のない構造では、そのモーラの存在が常に他のモーラに備わる分節特徴に依存しているので、知覚的な手がかりという点では撥音や二重母音に比べてはるかに劣ると考えられる。この点はとりわけ語末の位置において顕著で、助川ほか(1999)は知覚実験を通じて、語中位置に比べ語末位置にある長音には短母音化知覚が起こりやすいことを明らかにしている*²。このことは、語末環境では母音の長短が知覚上さほど大きな影響が出ていないこと——すなわち語末環境では長音のモーラを特徴づける知覚的な手がかりが他の特殊モーラに比べてかなり曖昧なものであることを示唆している。

この事実を複合外来語の短縮現象に引きつけて考えてみると、まず後部要素に含まれる長音が脱落しやすいことについては、知覚的な手がかりの乏しい長音をあえて保全することが知覚上の有効性に乏しく、それがゆえに脱落を来たしやすきものと考えら

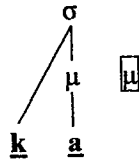
れる。たとえば「テレホン+カード」では、たとえプロソディのレベルで「2+2 (モーラ)」の構造を志向して短縮を起こしたとしても (*テレカー), 最後のモーラを支える母音の知覚効率は著しく低い。何よりも, この長音のモーラを保持してもしなくても, 知覚的な手がかりに結びつく分節音自体 (ka) には何の変化も起こらない点に注目したい。

(14) テレホン+カード

a. *テレカー



b. テレカ

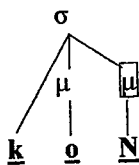


(14a)は長音を保持 (短縮語に編入) した際の音節構造を, (14b)は長音が脱落した際の音節構造を示しているが, 両者においてはその音節構造は異なっても (14a:重音節 ($\sigma_{\mu\mu}$), 14b:軽音節 (σ_{μ})), 分節構造/ka/には一切変化もたらされていない。モーラというものが分節音の支えがあってこそ知覚される実体であることを考慮すると, (14)に示したように特殊モーラ $\boxed{\mu}$ を保持しても無視しても分節構造に変化が起こらないということは, たとえ長音のモーラを脱落させても語形の同定にさほど影響が出ないことを示唆している。

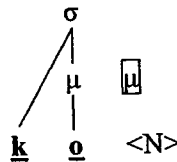
一方, 撥音・二重母音に関してはこれらが脱落すると大きな影響が出る。撥音を例にとると, (15a)の構造を目指すべきところで特殊モーラ (第二モーラ; $\boxed{\mu}$) が脱落してしまうと, (15b)のように分節音そのものも失われてしまう (<N>)。

(15) ツアー+コンダクター

a. ツアコン



b. *ツアコ



先述のとおり分節音の存在がそのモーラの存在を特徴付ける大きな知覚の手がかりにつながる以上, それが失われることによる影響は大きい。特殊モーラが脱落しても分節構造に全く影響が生じない長音(14)に比べ, 撥音を含む構造(15)では特殊モーラが失われると分節構造にも即座に影響もたらされる*³。

4.3 補完パターンの動機と効果

前節までの検討を通じて, 特殊モーラの脱落に伴って分節構造に変化が生じるか否かが撥音・二重母音のグループと促音・長音のグループの大きな違いであることが分

かった。特殊モーラ μ の脱落によって分節構造に変化が起こる撥音・二重母音は複合外来語の短縮過程において残存しやすく、一方、特殊モーラ μ の存否が分節構造に影響を与えない長音・促音は短縮の過程で脱落しやすい。このことから、脱落の動機として長音・促音の知覚効率の低さが関与しているとの見方を示したが、この分析を踏まえると、先に 2.2 節で指摘した補完パターンの動機と効果についても同様の角度から考察を加えることができる。

補完パターンとは、特殊モーラの直後にある自立モーラを短縮語に編入することによって「2+2」モーラからなる韻律構造が満たされる現象を指す。

(16) 補完パターン

- ミニモニ (ミニ+モ一ニング娘)
- メルアド (メール+アドレス)
- ハリポタ (ハリー+ポッター)
- ラキスト (ラッキー+ストライク)

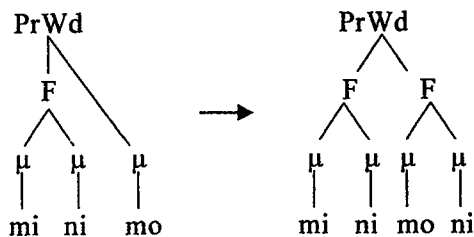
このパターンは長音・促音を持つ構造に限って形成され、撥音・二重母音を含む構造では見られないことから、これまで検討してきた特殊モーラの脱落傾向と並行的な関係にある現象だと考えられる。

補完パターンには、次の二点においてしかるべき動機が備わっている。第一に、自立モーラを補完することで「2+2」モーラからなる均整のとれた韻律構造が保障される。たとえば(17a)のような単に長音が脱落した形では「2+1」モーラからなる不均整な韻律構造が作られざるを得ないが*4、この形からさらに自立モーラが編入されることによって、短縮形に一般的な「2+2」構造のプロソディが保障される(=17b)。

(17) 2+2

a. *ミニモ__

b. ミニモニ



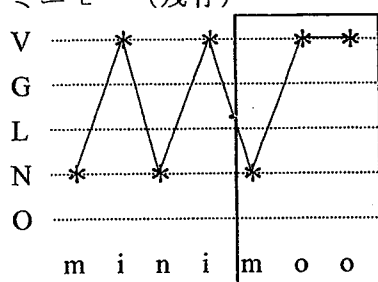
「2+2」モーラ構造は二つのフットからなる均整のとれた韻律構造 F+F をなすが、この構造が日本語においてしばしば志向されやすいことはオノマトペの語形成や代償延長現象などを通じて従来明らかにされている (Tateishi 1989, Poser 1990, Itô 1990, 那須 2001)。F+F 構造は日本語の韻律語形成におけるある種の典型的な「鑄型」として機能していると考えられ、複合外来語の短縮もこの鑄型的な構造を目指している。したがって自立モーラによる補完は、こうした典型的な鑄型構造を作り出すための方略

の一つだと考えられる。

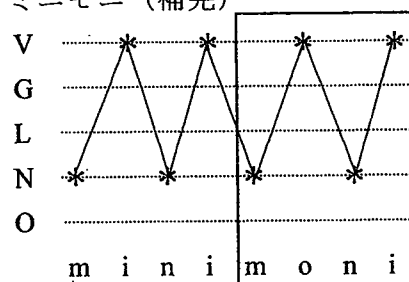
二つ目の動機として考えられることは CV モーラの存在による知覚的な効果である。CV 構造からなるモーラを補完することにより、長音によるモーラの補充によっては得られない知覚上の効果がもたらされる。仮に「2+2」モーラ構造が必要なのであれば「*ミニモー」のような長音編入形でも構わないわけだが、4.2 節で論じたようにこの形では短縮形の第3・4モーラ間に母音の音色の遷移がなく、特に第4モーラの知覚的な手がかりが乏しい。他方、自立モーラを編入することにより、第3・4モーラ間の知覚的な相違を際立たせることができる。この様子はソノリティ階層を用いて示すと理解しやすい。

(18) ソノリティ

a. *ミニモー (残存)



b. ミニモニ (補完)



長音形「*ミニモー」と補完形「ミニモニ」では第3・4モーラ部分（窓掛け部分）のソノリティ遷移にはっきりとした違いがある。前者(18a)では第3モーラ（「モ」）で一旦上昇したソノリティがそのまま平坦に第4モーラ（長音）に続くのに対して、後者(18b)では第3・第4モーラにおいて二つのソノリティのヤマができる。同じ2モーラからなる構造であっても、CVV 構造(18a)に比べて CVCV 構造(18b)でははっきりした聞こえの違うヤマが形作られるのである。

ソノリティに関して二つのヤマが構成されることは、特に短縮語の第4モーラの知覚に際しての大きな手がかりにつながる。分節構造に変化がないがゆえに平坦なソノリティ構造が続く(18a)に対して、(18b)の補完形の構造では短縮語に自立モーラを編入することで分節音のソノリティに起伏がもたらされる。すなわち、この知覚上の手がかりの差が補完形を生む動機として働いていると考えられる。

5. 語末環境と語中環境

最後の課題として、この節では 2.4 節で「第二の疑問」として指摘した問題について検討する。重原 (2004) の統計によれば、短縮過程における促音・長音の脱落傾向は当該の促音・長音がベースの前部要素/後部要素のいずれに含まれるかによって異なることが報告されている。

(19) 脱落率の違い

a. 前部要素第2モーラ

種別	語数	割合
/R/	15/48	(31.3%)
/Q/	7/12	(58.3%)

b. 後部要素第2モーラ

種別	語数	割合
/R/	44/70	(62.9%)
/Q/	29/29	(100.0%)

同じ促音・長音であっても、後部要素に属するものがかなりの割合で脱落するのに対して前部要素に属するものは脱落率が低い。実際、前部要素の促音・長音が編入された次のような短縮形は比較的多く見られる。

(20) モームス	(モ <u>二</u> ニング+娘)	ショッピン	(ショ <u>ッ</u> キング+ピンク)
スーファミ	(ス <u>二</u> パー+ファミコン)	ブップラ	(ブ <u>ッ</u> ク+プラザ)
ビーサン	(ビ <u>二</u> チ+サンダル)	ネッカ	(ネ <u>ッ</u> ト+カフェ)

短縮ベース内における促音・長音の所在の違い(前部要素/後部要素)と脱落率との関係をめぐっては、当該の促音・長音の短縮語中での位置がこの問題に深く関わっていると見られる。ベースの後部要素の第二モーラに促音・長音が含まれる場合において、これらが短縮の際に取り込まれるとすると、これらの特殊モーラは短縮形の末尾に組み込まれることになるが(例: スケート+ボード → スケボ二)、短縮語の末尾の位置は、促音・長音のそれぞれに関して以下に述べるような特別な性質の生じる位置である。

まず促音については、日本語の音配列において促音で終わる構造が認められないことが大きな特徴としてまず指摘できる。以下のような短縮形は、語末促音という極めて有標な構造を含む。

(21) 語末促音

<u>ポテ</u> ト+ <u>チッ</u> プス	→	* <u>ポテ</u> チッ (ポテチ <u>二</u>)
<u>ハリ</u> ー+ <u>ポッ</u> ター	→	* <u>ハリ</u> ポッ (ハリポタ)

一方、ベースの前部要素の第二モーラに促音が含まれる場合にはこのような語末促音の環境が短縮語において構成されない。(22)に見るように、ベースの前部要素の促音は短縮語中では語末環境には位置しない。

(22) 語中促音

<u>ショッ</u> キング+ <u>ピン</u> ク	→	ショッピン
<u>ブッ</u> ク+ <u>プラ</u> ザ	→	ブップラ

すなわち、促音の編入をめぐる前部要素・後部要素の振る舞いの違い(19)は、短縮によって語末促音の構造が作られるか否かによる違いであると言える。

長音については促音のように語末位置を禁忌とはしないものの、「語末」という位置そのものは長音に関してもやはり特殊な位置である。4.2 節で述べたように、助川

ら(1999)の実験結果によれば語末長音は語中長音よりも知覚的な手がかりが乏しく、短縮語以外の一般的環境においても脱落を来たしやうい。語中であれ語末であれ、長音を含む重音節では同じ音色の母音が続く点で特殊モーラ(重音節の第二モーラ)の知覚的な手がかりが乏しいわけだが、語末においてはそれがさらに顕著であると考えられる。

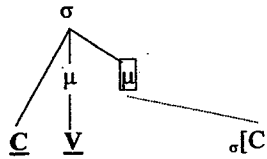
6. 結語

本稿では複合外来語の短縮過程における特殊モーラの脱落傾向を通じて、促音・長音のグループと撥音・二重母音のグループとの間に見られる非対称性について検討した。促音ならびに長音の脱落傾向は、特殊モーラの自立性と密接なかかわりを持つ。このことは、(10)にまとめたように、特殊モーラのタイプを母音性/子音性の二つに分けることで明示的に捉えられる。複合語短縮の過程で脱落を来たしやうい特殊モーラ(長音・促音)は、母音性/子音性それぞれの特殊モーラのグループにおいていずれも相対的に自立性の低い特殊モーラに位置づけられる。

こうした自立性の違いは、それぞれの特殊モーラを含む音節での分節音の組成と深く関わっている。短縮過程で脱落しやうい促音・長音は独自の分節音を持たない特殊モーラであるがゆえに、これらが脱落しても分節構造そのものに変化がないため知覚効率上の影響が少ない。すなわちこれらの特殊モーラの脱落が促進されやういのは、脱落によってもたらされる分節構造への影響の少なさによる。他方、独自の分節音を持つ撥音・二重母音はその脱落によって分節構造に変化が生じるため知覚に対する影響が生じやうい、そのために短縮語内に残存しやういとされる。また、本来特殊モーラが編入されるべきところ、代わりに自立モーラが短縮語に編入される「補完パターン」は促音・長音を含む構造にしか起こらない。これは、独自の分節音を具有しないこれらの特殊モーラに比べて、自立モーラがソノリティ構造において隣接するモーラとの間に明瞭な知覚的な差異を含んでいるからだと考えられる。

注

1. 重原(2004)の統計は特殊モーラの「残存率」に関するもの。残存率と脱落率はちょうど表裏の関係にある。(4)では重原による残存率に基づいて脱落率を求めている(この点、(19)も同じ)。
2. 助川らは「どれが高校付きの大学?」という例文を用い、「高校」の最初の長音と語末の長音をそれぞれ短く編集した刺激音声被験者に聞かせて短母音化知覚の起こりやすさを調べ、その結果、語末長音での短音化知覚が明らかに遅れることを報告している。
3. 促音に関しても長音と同様な特徴がある。促音のモーラを特徴づける子音(音節末尾子音)はもともとその直後の音節の頭子音であり、以下に図示するように、当該音節に本来含まれる子音ではない。すなわち促音を含む音節構造でも長音の場合(14)と同様に、音節第二モーラ \square の存否は当該音節に本来含まれる分節構造(CV)そのものには影響を与えない。



4. 「2 + 1」構造は不均整ではあるものの非文法というわけではない点に注意。

参考文献

Itô, Junko (1990) "Prosodic minimality in Japanese." *CLS* 26(2): 213-239.

窪菌晴夫 (1992) 「日本語のモーラ：その役割と特性」『日本語のモーラと音節構造に関する総合的研究(1)』(文部省科学研究費重点領域研究「日本語音声」E10 班研究成果報告書), 48-61.

窪菌晴夫 (1999) 「歌謡におけるモーラと音節」音声文法研究会 (編)『文法と音声Ⅱ』くろしお出版, 241-260.

那須昭夫 (2001) 「重複形オノマトペの韻律構造」『大阪外国語大学論集』25: 115-125.

Poser, William J. (1990) "Evidence for foot structure in Japanese." *Language* 66: 78-105.

重原久美子 (2004) 「外来語複合語の短縮における特殊モーラのあらわれかた」平成15年度大阪外国語大学卒業論文.

助川泰彦・前川喜久雄・上原聡 (1999) 「日本語長母音の短母音化現象をめぐる諸要因の実験音声学的研究と音声教育への示唆」アラム佐々木幸子 (編)『言語学と日本語教育』くろしお出版, 81-94.

Tateishi, Koichi (1989) "Theoretical implications of the Japanese musician's language." *WCCFL* 8: 384-398.

上野善道 (1984) 「地方アクセントの研究のために」『国文学 解釈と鑑賞』昭和59年5月特別増刊号.